



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園初等学校 校長 佐々 信行 (さっさ のぶゆき)

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当(横浜市)、日本語イマージョン・プログラム教諭(バージニア州)、ワシントン補習授業校を経て、現職。

帰国生の目で

今年の日本の夏は、不安でいっぱいの季節になりました。東京でも連日摂氏35度を超える猛暑となり、大型の台風が上陸して豪雨を降らせました。地球温暖化の影響だとすれば、これからますます厳しい状況が起きて来ると予想されます。公務員や政治家、有名企業など、信頼できるはずの人々の不祥事がつぎつぎに明るみに出されました。特に、年金制度に対する信頼が大きくゆらいだことは、日本の社会のこれからの暗雲をもたらしました。日本で1年間に自殺する人の数は、3万人を越え、これはイラクでテロのために死ぬ人よりも多いかもしれないそうです。毎日のように凶悪な事件が報道され、さらに、横綱や総理大臣まで心の病に倒れるに至っては、日本の未来に希望を持つことは、非常に難しいと言わざるを得ません。

学校も、大きな悩みと戸惑いの中にあります。変わって来た家庭や地域社会の中で育てて来た子どもたちの問題や、彼らを育てる親の悩みに、今までの経験では応えることが出来なくなって来ています。たくさんのベテランの先生たちが自信を失って仕事を続けられなくなりました。なんとか事態を改善しようとして打った手が、かえって状況を悪くしているような面もみられます。

日本の社会は、これからどんどん悪くなり、崩壊の道を歩むのではないかという恐れさえ実感として感じられるようになりました。これからどうしたらいいのか、この悩みからの出口をどこに求めたらいいのか、分からなくなっているのが今の私たちかもしれません。

◆ 日本を見る

そんな中で、最近、日本で暮らすアメリカ人の話を聞く機会がありました。その人は、日本に暮らし始めて驚いたことの例を挙げてくれましたが、その中のいくつかは、日本に住む私たちには気づきにくい、日本人の強さをあらためて認識させてくれるものでした。

一つの例は、地震等の災害にあった被災地の人々の冷静さと、粘り強さです。物が欠乏し、苦しい状況の中でも商店の略奪などが起きることもなく、平静に秩序が保たれていることは、外国人の目から見ると不思議とさえ思えるということでした。そう言えば、他国では、被災地に救援物資を送るトラックが襲われるというニュースも聞きました。

現金の入った財布をコーヒーショップの座席に置き忘れた話もありました。帰ってくることはないとかきらめていたが、財布は店の人に届けられ、無事に帰って来たそうです。これも、外国ではなかなか難しいことのようにです。

そう言えば、夏休みに編入試験を受けにきた子の家族が、電車の中に子どもの大切な作品を置き忘れるということがありました。私は、かなり自信を持って「鉄道会社に連絡すれば、見つかると思いますよ。」と言いました。作品は、ちゃんと家族のもとに帰って来ました。

東京や大阪のような大都会で、小学生が大人に付き添われることなく電車やバスを使って通学していることも、外国の人から見れば信じられないと言います。

悪いことばかりに目が向いて悲観的になりそうなきにこの話を聞いて、あらためて自分を客観的に見ることの難しさや大切さを感じました。特に、今のような時代には、自分たちの持っている力や良さをしっかり認識して、自信と誇りを持つこと



運動会の準備 - 帰国生にとっては「異文化体験」